

戦場

夢野久作

青空文庫

はしがき

この一文は目下、埃^{エジプト}及のカイロ市で外科病院を開業している芬^{ポーランド}蘭^{ドイツ}生まれの独逸医学博士、仏蘭西^{フランス}文学博士オルクス・クラデル氏が筆者に送ってくれた論文? 「戦争の裡面」中の、戦場描写の部分である。原文は同氏の手記に係る独逸語であるが、今まで世界のどこにも発表されたことのない、珍しいものである。

当時、中欧最強の新興国として、現在の日本と同じように、全世界の砲門を睨^{にら}み返していた彼^かのモノスゴイ独逸魂の、血潮したたる生々しい断面を、この一文によつて読者諸君は眼^まのあたり見る事が出来るであらう。

オルクス・クラデル氏は、歐洲大戦終了後、一時長崎の某外科病院（日本人経営）に傭^{やとい}医員として、来ていたことがある。それが、或る軍事上の研究の使命を帯びていたものであることは、この論文中の他の部分に於て察知出来るのである。

筆者は嘗^{かつ}て鉄道事故のため負傷して、その外科病院に入院し、クラデル氏と知り合つたのである。氏に就^ついての印象は、遠慮のないところ、世にも不可思議な存在で、氏は自身

に、「私は白人の中でも変り種です。学名をヒンドロ・ジウトロフィと呼ばれる一寸坊の一種です」と説明するように、背丈がグツと低く、十三、四歳の日本児童ぐらいにしか見えないところへ、頸部は普通の西洋人以上に巨大く発達しているために、どうかすると佝僂むしに見え易い。然しクラデル氏は、その精神に於ては、外貌とは全く反対な人物で、通例一般の片輪根性かたわや、北欧の小国人一流の狡猾なところはミジンもなく、如何いかにも弱い、底の知れないほど人の好い高級文化人である。そして、勿論本職の外科手術については驚ろくべき手腕を持っていた。

さて最後に、彼が嘗て軍医として活躍したにもかかわらず、戦争の問題になると、徹頭徹尾戦慄と呪咀じゆその心を表明していたことを書き添えておく。

一

……おお……悪魔。私は戦争を呪咀のろう。

戦争という言葉を聞いただけでも私は消化が悪くなる。

戦争とは生命のない物理と化学とが、何の目的もなしに荒れ狂い吼えまわる事である。

戦争とは蒼白い死体の行列が、何の意味もなく踊りまわり跳ねまわる中に、生きた赤々とした人間の大量が、やはり何の興味も、感激もなしにバタバタと薙^なぎ倒^{ちぎ}おされ、千切られ、引裂かれ、腐敗させられ、屍毒化させられ、破傷風化させられて行くことである。

その劇薬化させられた感情の怪焰……毒薬化させられた道德の異臭に触れよ。戦慄せよ。

……一九一六年の一月の末。私が二十八歳の黎明……^{ベルリン}柏林市役所の傭医員を勤めていた

私は、カイゼルの名によつて直ちに軍医中尉を拝命して戦線に出^いでよ……との命令で、貨

物列車——トラック——^{しちようしゃ}輜重車——食糧配給車という順序にリレーされながら一直線に

ヴェルダンの後方十基^{キロ}米の処に在る白樺の林の中に到着した。

その林というのは砲火に焼き埋められた大森林の残部で、そこにはヴェルダン要塞を攻囲している我が西部戦線、某軍団所属の衛生隊がキャンプを作っていて、^{おびただ}夥しい衛生材料と、食糧なぞの巧みにカモフラージュしたものが、離れ離れに山積して在った。

勿論、私は到着するがするまで、自分がどこに運ばれて行くものやら見当が附かなかつた。市役所で渡された通過章に書いて在る訳のわからない符号や、数字によつて、輸送指揮官に指令されるまにまに運ばれて来たので、そこがヴェルダンの後方の、死骸の大量蓄積場……なぞいうことは到着して後、暫くの間、夢にも知らずにいたのであつた。ただ自

分の居宿に宛てられた小さな天幕の外に立つと、直ぐ向うに見える地平線上に、敵か味方かわからないマグネシウム色の痛々しい光弾が、タラタラ、タラタラと入れ代り立代り撃ち上げられている。その青冷めたい光りに照し出される白樺の幹の、硝子^{ガラス}じみた美しい輝き……その周囲に展開されている荒涼たる平地の起伏……それは村落も、小河も、池も、ベタ一面に撒布された死骸と一所に、隙間なく砲弾に耕され、焼き千切^{ちぎ}られている泥土と氷の荒野原……それが突然に大空から滴^{した}たり流れるマグネシウム光の下で、燐火の海のようにギラギラと眼界に浮かみ上つては又グウ——ンと以前^{もと}の闇黒の底に消え込んで行く凄^{せい}愴^{そう}とも、壮烈とも形容の出来ない光景を振り返って、身に沁み渡る寒気と一緒に戦慄し、茫然自失しているばかりであった。天幕の中に帰って制服のまま底冷えのする藁^{わら}と毛布の中に埋まつてからも、覚悟の前とはいいいながら、自分は何という物凄い処に來たものであろう。いったい自分は何という処に、何しに來ているのであろう……といったような事をマンジリともせずに考えながら、あっちへ寝返り、こっちへ寝返りしているばかりであった。

しかし夜が明けると間もなく、程近いキャンプの中から起出して挨拶に來た私の部下の話で一切の合点が行ったように思つた。

私の部下というのは、私とは正反対に風采の頗^{すこ}ぶる立派な、カイゼル髭^{ひげ}をピンと跳ね上げた好男子の看護長で、その話ぶりは如何にも知ったか振りらしい気取った軍隊口調であった。

——我が独逸軍は二月に入ると間もなくヴェルダンに向つて最後の総攻撃を開始するらしい。目下新募集の軍隊と、新鑄の砲弾とを、続々と前線に輸送中である。そうして貴官……オルクス・クラデル中尉殿は、その来るべき総攻撃の際に於ける死傷者の始末を手伝うために、このキャンプに配属された、最終の一人に相違ないと思われる。

——我が独逸軍の一切の輸送は必ず夜中に限られているようである。仏軍は、そうした我軍の輸送を妨げるために、昨夜も見た通り毎晩日が暮れかかると間もなくから、不規則な間隔において、強力な光弾を打上げては、大空の暗黒の中に包まれた繫留気球に仕掛けた写真機で、独逸軍全線の後方を残る隈^{くま}なく撮影しているらしい。僅かな行李^{こうり}の移動でも直ぐに発見されて、その方向に集中弾が飛んで来るので、輸送がナカナカ手間取っている。現に左手の二三基米^{キロ}の地平線上に、纔^{わず}かに起伏している村落の廢墟には、数日前から二個大隊の工兵が、新しい大行李と一緒に停滞したまま動き得ないでいる状態である。

——だからあの光弾の打上げられている方向がヴェルダンの要塞の位置で、愈々^{いよいよ}攻撃

が始まったら、ここいらまでも砲弾が飛んで来ないとは限らない。

——新しく募集した兵卒は戦争に慣れないから、死傷者が驚くべき数に達することは、今から十分に予想されている。云々。^{うんぬん}

コンナ話を聞かされている中^{うち}に私は何となく横腹がブルブルと震え出して来た。否々決して寒さのためではなかった。五百米^{メートル}ばかり隔たった中央の天幕の中に居る衛生隊司令官のワルデルゼイ軍医大佐の処へ挨拶に行つて巨大な原油ストープの傍に立ちながらもこのブルブルが続いていた。のみならずその司令官の六尺豊かな巨軀と、鬚^{ひげ}だらけの獐^{どう}猛^{もう}な赤^{あか}面^{づら}を仰ぎながら、嚴格、森儼を極めた新任の訓示を聞いている中^{うち}にも、そのブルブルが一層烈しくなつて、胸がムカムカして吐きそうな気持ちになつて来たのには頗^{すこぶ}る閉口したものであつたが、これは多分私が、戦地特有の神経病に早くも囚われかけていたせいであつたろう。實際ソナ一時的の神経障害が在り得ることを前以て知っていなければ、私はあの時にマラリヤと虎列刺^{コレラ}が一所に來たと思つて狼^{ろう}狽^{ばい}したかも知れないのであつた。しかしイザとなると私は、やはり神経障害的ではあつたが、案外な勇氣を振り起すことが出来た。零下十何度の殺人的寒氣の中に汗がニジム程の元氣きで腕一パイに立働く事が出来た。

その二月の何日であつたか忘れたが、たしか総攻撃の始まる前日のことであつた。私たちの居るキャンプまで巡視に來た衛生隊司令官のワルデルゼイ軍医大佐は、例の鬚^{ひげ}だらけの獯猛な赤面を妙な恰好に笑い歪^{ゆが}めながらコンナ予告をした。

「……クラデル博士。ちよつとこつちへ來て下さい。僕がコンナ話をした事は秘密にしておいてもらいたいですがね……ほかでもないですがね。大變に失礼な事を云うようじゃが、柏林^{ベルリン}に居られる時のような巧妙親切を極めた、君一流の手腕は、戦場では不必要と考えてもらいたい事です。こんな事を云うたら非常な不愉快を感じられるかも知れないが、それが戦場の慣わしと思つて枉^まげて承服して頂きたいものです。その理由は遠からずわかるじやろうが、イヨイヨとなつたら、ほかの処の負傷はともかくも両脚の残つとる奴は構わんからドシドシ前線に送り返してもらわなくちゃ駄目ですなあ。戦線特有の神経障害で腰の抜けた奴は、手鋏^{てくわ}か何かで容赦なく尻ベタをぶん殴つてみるんですなあ。それでも立たん奴は暫く氷つた土の中へ放つておくことです。それ以上の念を入れる隙^{ひま}があつたら、他の負傷者を手当てする事です。時と場合に依つては片目と右手だけ残っている奴でも戦線に並べなくちゃならん。ええですか。ことに今度のヴェルダン総攻撃は……まだいつ始まるかハッキリしないようですが……西部戦線、最後の荒療治ですからなあ。死んだ奴は魂

だけでも塹壕に逐^おい返す覚悟でないと間に合いませんぞ……ええですか……ハハハ……」

その時も私は妙に氣持が重苦しくなつて、胴震いが出て、吐氣を催したものであったが……。

そうしてイヨイヨ総攻撃が始まつた。

昨日までクローム色に晴れ渡つていた西の方の地平線が、一面に紅茶色の土煙に蔽われていることが、夜の明けるに連^つれてわかつて来た。その下からふんだんに匍^はい上つて来るブルンブルンブルンブルンという重苦しい、根強い、羽ばたきじみた地響を聞いていると、地球全体が一個の、巨大な甲虫に変化しているような感じがした。それに連れて西の空の紅茶色の雲が、見る見る中^{うち}に分厚く、高層に、濃厚になつて行くのであつた。

その紅茶色の雲の中から併列して進^{ほとばし}る仏軍の砲火の光りが太陽色にパツパツと翻つて見える。空氣と大地とが競争でその震動を、われわれの靴の底革の下へ、あとからあとから膨れ上らせて来る。それと同時に伝わつて来る目にも見えず、耳にも聞えない無限の大霊の戦慄は、サーカスじみた驚嘆すべき低空飛行で、吾々の天幕を震撼して行く味方の飛行機すら打消し得ない。

その地殻のドン底から鬱積しては盛り上り、絶えては重なり合って来る轟音の層が作るリズムの継続は、ちょうど日本の東京のお祭りに奏せられる、あの悲しい、重々しい BAKA-BAYASHI のリズムに似てゐる……。

Ten 《テン》 Teretsuku 《テレツク》 Teretsukutsu 《テレツクツ》 Don 《ドン》 Don
《ドン》……

……という風に……あの BAKA-BAYASHI の何億万倍か重々しくて物悲しい、宇宙一パイになる大きさの旋律が想像出来るであろうか……。

私は日本の東京に来て、はじめてあの BAKA-BAYASHI のリズムを聞いた時に、殆んど同時に、大勢の人ゴミ中でヴェルダン戦線の全神経の動揺を想起して戦慄した。あの時の通りの吐気が腸のドン底から湧き起って来るのをジツと我慢した。あの時から私の脊椎骨の空洞に沁み込んで消え残っている戦慄……血と、肉と、骨と、魂とを同時に粉碎し、嘲弄するところの鉄と、火と、コンクリートの BAKA-BAYASHI……地上最大の恐怖を描きあらわすところの最高度のノンセンスのオルケストラ……。

そのオルケストラの中から後送されて来る演奏済みの楽譜……死傷者の夥しさ。まだ日の暮れない中に半分、もしくは零になりかけている靈魂の呻吟が、私達の居る白樺の林

の中から溢れ出して、私を無限の強迫観念の中に引包んでしまった。

中央の大キャンプと、その周囲を取巻く小キャンプは無論超満員で、溢れ出したものは遅く上つて来た半欠^かけの月と零下二十度近い、霜の氷り付いた黒土原の上に、眼も遙かに投出されたままになつている。私も最初の中は数名^{うち}の部下を指揮して、それぞれの手当に熱中していたが、終い^{しま}には熱中のあまり助手と離れ離れになって、各自^{めいめい}に何百人かの患者を受持つて独断専行で片付けなければならない状態に陥つた。否……ことによると私^がが手当てをした人数は何千人に上るかも知れない。あとからあとから無限の感じの中へ忘却して行つたのだから……。

戦後、我独逸軍の衛生隊の完備していたことは方々で耳にして来たものであるが、そんな話を聞く度^{たびごと}毎に、私は身体が縮まる思いがした。全くこの時は非道^{ひど}かつた。手を消毒する薬液は愚か、血を洗う水さえ取りに行く隙^{ひま}が無かつたので、私の両手の指は真黒く乾^ひ固^{かた}まつた血の手袋のために、折曲りが利かなくなつた。一つには非常な寒さのせいであつたろう。兵士の横腹から出る生^{なま}温^{あた}い血が手の甲にドクドクと流れかかると、その傷口から臓腑の中へ、グツと両手を突込みたい衝動に馳られて仕様がな位であつた。

初めて見る負傷兵もモノスゴかつた。

片手や片足の無い者はチットモ珍らしくなかった。臓腑を横腹にブラ下げたまま発狂してゲラゲラ笑っている砲兵。右の顚顚こめかみから左の顚顚へ射抜かれて視神経を打切られたらしい、両眼をカツと見開いたまま生きていて「カアチャンカアチャン」と赤ん坊みたいな声で連呼している鬚だらけの歩兵曹長。下顎を削り飛ばされたまま眼をギョロギョロさして涙を流している輜重兵しちようへいなど、われわれ外科医の智識から見ると、奇蹟としか思えない妖怪的な負傷兵の大群が、洪水のように戦線から逆流して来て、私の周囲に散らばり拡がって、めいめいそれぞれの苦痛を、隣同志、無関係にわめき立てる。又は歌を唄い、祈りを捧げ、故郷の親兄弟妻子と夢うつつに語り合う。ゴロゴロと咽喉のどを鳴らして息を引取る……柏林ベルリンの酒場や、巴里パリの珈琲店コーヒーや、倫敦ロンドンの劇場と同じ地続きの平面上に在るとは思えない恐怖の世界……死人の世界よりもモット物すごい現実の悪夢世界……そんなものが在り得るならばあの時の光景がそうであつたろう。

夜が深くなつて来るに連れて……負傷兵が増加して来るに連れて……一層、仕事が困難になつて来た。傷口を診察するタヨリになるのは螢色の月の光りと、木の枝の三叉みつまたに結び付けて地に立てた懷中電燈の光りだけで、それすら電池が弱りかけているらしく光線がダンダンと赤茶氣て来る。材料なんぞも殆んど欠乏してしまつたので、私は独断で手近い

天幕を切り裂いて繃帯ほうたいにして、自分の身のまわりだけの負傷者を片付けて行つた。戦争が烈しいために、万事の配給が困難に陥っているらしかった。

私がソナ風に仕事に忙殺されている中に、白樺の林の奥の方から強力な携帯電燈の光りがギリギリと現われて、患者の間を匍ういまりながらダンダンと私の方へ近附いて来た。私は電池の切れかけている私の電燈に引較ひきくらべて、その蓄電装置らしい冴え返つた光芒を羨ましく思った。誰かこつちへ加勢に来るのではないかと期待しいしいチヨイチヨイその方向を見ていると、その光りの持主は思いがけない司令官のワルデルゼイ軍医大佐である事がわかつた。

軍医大佐は足の踏む処も無く並び重なっている負傷兵の傷口を一々点検しているらしい恰好である。その傍には工兵らしい下士卒が入れ代り立代り近附いて来て、大佐が指さした負傷兵を手取り足取り、引立てながらどこかへ連れて行く様子である。

私は軍医大佐の熱心ぶりに感心してしまった。

昼間見た時の同大佐はヒンデンブルグ將軍を小型にしたような、イヤに傲岸ごうがん、冷血な人間に見えた。今頃はズット後方の掩蔽部えんぺいかキャンプの中で、どこかの配給車が持つて

来た葉巻でも吹かして納まり返っている事と思っていたが、まさかにこれ程の熱情を持つて職務に精励しようとは思わなかった。

そうしたワルデルゼイ大佐の精励ぶりを見ると同時に私は、私の良心が、私の肺腔一パイに涙ぐましく張り切つて来るのを感じた。そうしてイヨイヨ一生懸命になって、追い立てられるように、次から次へと負傷者の手当を急いでいたものであったが、間もなく私の間近に接近して来たワルデルゼイ軍医大佐は、私がタツタ今、こむら腓を手当てしてやったばかりの将校候補生の繃帶を今一度解いて、念入りに検査し始めた。

それを見ると私は多少の不满を感じたものであった。

……それ以上の手当は現在の状態では不可能です……

という答弁を、腹の中で用意しながら、てのひら掌の血糊をゴシゴシと揉み落しているうちに、果せる哉、かな軍医大佐の電燈がパツと私の方へ向けられた。

「……や。クラデル君ですか。ちよつとこつちへ来て下さい」

そう云う軍医大佐の語気には明らかに多少の毒氣が含まれていた。しかし私は勇敢に軍医大佐の側に突立つて敬礼した。

ワルデルゼイ軍医大佐は砲弾の穴の半分埋まっている斜面に寝かされている、まだウラ

若い候補生の身体からだを電燈で指し示した。

「この小僧は眼が見えないと訴えているようですが真実ですか」

その候補生は鼻の下と腮あごに、黄金色きんいろの鬚が薄く、モジャモジャと生えかけている、女のような美少年であつた。まだ兵卒の服を着ているところを見ると、戦線に出てから何か失策を仕出しでかしたために進級が遅れたものらしい。顔から胸が慘酷むごたらしい鼻血と泥にまみれて、両手と、ズボンの破れから露出した膝小僧の皮が痛々しく擦り破れていたが、それでも店頭でんの蠟人形ソックリの青い大きな瞳を一パイに見開いて、鋼鉄色の大空を凝視していた。一心に私等の言葉うちを聞いているらしい赤ん坊のような表情であつた。

その横顔を見ている中うちに私は少なからず心が動いた。私は生れ付きコンナ醜い恰好に出て来ているために女性に愛せられる見込みもなく、男性にはイツモ輕蔑され勝ちで通つて来たために、いつの間にか一種の片輪根性かたわねみたいな性格に陥つて来たものであろう。こうした美しい、若い男を見ると、いつも、理屈なしに親しくしてみたい……親切に世話をしで遣りたいような盲目的な衝動に駆られて仕様がなかったのであつた。

「ハイ。この候補生は前進の途中、後方から味方の弾丸に腓こむらを射抜かれたのです。それで匍はいいながら後退して来る途中、眼の前の十数メートルの処で敵の曳火弾えいかだんが炸裂したのだ

そうです。その時には奇蹟的に負傷はしなかったらしいですが、烈しい閃光に顔面を打たれた瞬間に視覚を失ってしまったらしいのです。明るいのと暗いのは判別出来ませんが、そのほかの色はただ灰色の物体がモヤモヤと眼の前を動いているように思うだけで、銃の照準などは無論、出来ないと申しておりますが……睫毛^{まつげ}なども焼け縮れておりますようである……」

「ウム。それで貴官はドウ診断しましたかな」

「ハイ。多分戦場で陥り易い神経系統の一部の急性麻痺だろうと思ひまして、出来るなら後退さして頂きたい考えであります。時日が経過すれば自然と回復すると思ひますから……視力の方が二頭腓^{にとうひちようきん}腓^ひ筋^{きん}の回復よりも遅れるかも知れませぬが……」

「ウム。成る程成る程」

と軍医大佐は頻^{しき}りに首肯^{うなず}していたが、その顔面筋肉には何ともいえない焦燥^{いらだ}たしい憤懣^{ふんまん}の色が動揺するのを私は見逃さなかった。

大佐はそれから何か考え腰^かを曲めて、携帯電燈の射光を候補生の眼^{がん}に向けた。私と同様に血塗^{ちまみ}れになった、拇^{おやゆび}指^{ゆび}と食^{ひとさし}指^{ゆび}で、真白に貧血している候補生の眼^{がん}瞼^{けん}を引っぱり開けた。繰返し繰返し電燈を点滅したり、候補生の上衣のボタンを引っくり返して、

そこに縫い付けて在る姓名を読んだりしていたが、その中に突然、その候補生の窶^{やつ}れた、柔らかい横頬を平手で力一パイ……ピシャリツ……と喰らわせたのには驚いた。そうして今二つ三つ烈しい殴打を受けて、声も立て得ずに両手を顔に当てたまま、手足を締め込んでいる候補生の軍服の襟首を右手でムズと掴みながら、

「立てッ……エエ。立てと云うに……立たんかッ……」

と大喝するのであった。

私は昨日の昼間のワルデルゼイ司令官の言葉を思い出した。それは、

……死んだ奴は魂だけでも戦線へ逐^おい返せ！

という宣言であつたが、それ程の切羽^{せつば}つまつた現在の戦況であるにしても、これは又、何という残酷な事をするのだろうと慄^{ふる}え上つてしていると、又も更に驚いた事には、その候補生が自分の膝を、泥と血だらけの両手に掴んで、美しい顔を歪^{ゆが}めるだけ歪めて、絶大の苦痛を忍びながらヨタヨタと立上つた事であつた。

その悲惨そのものとも形容すべき候補生の不動の姿勢を、軍医大佐は怒気満面という態度で見下しながら宣告した。

「……ヨシ……俺に跟^ついて歩いて来い。骨が碎けていないから歩いて来られる筈だ。クラ

デル君……君も一緒に来てみたまえ。研究になるから……」

「……ハツ小官^{わたくし}は今すこし負傷兵を片付けましてから……」

「まあいい。ほかの連中がどうか片付けるじやろう。……来てみたまえ。吾々軍医^{われわれ}以外の独逸国民が誰も知らない戦争の裡面を見せて上げる。独逸軍の強い理由^{わけ}がわかる重大な秘密だ。君のような純情な軍医には一度、見せておく必要がある。……これは命令だ……」

「……ハツ……」

と答えて私は不動の姿勢を取った。

軍医大佐はそうした私の眼の前に、苦酸^{にかす}つばいような、何ともいえない神秘的なような冷笑の幻影を残しながらパチンと携帯電燈の光りを消した。佩劍^{はいけん}の^{つか}をガチャリと背後に廻して、悠々と白樺の林の外へ歩き出した。

その背後から候補生が、絶大の苦痛に価する一步一步を引摺^{ひきず}り始めた。夜目にも白々とした苦しそうな呼吸を、大地にハアハアと吐き落しながら……。たまらなくなった私が、何がなしにその背後から追附いて、その右腕を捉えた。自分の肩に引っかけて力を添えてやったが、私の背丈が低すぎるので、あまり力にならないらしかった。

「……ありがとうございます。御座います。クラデル様……」

候補生が大地に沁み入るような暗い、低い、痛々しい声で云った。白い水蒸気の息をホ——ツと月の光りの下に吐き棄てたがモウ泣いているらしかった。

二

私たちの行程は非常に困難であつた。

涯^{はて}しもなく漫々たる黒土原と、数限りない砲弾の穴が作る氷と泥の陷^{おとし}穽^{あな}の連続。その上に縦横ムジンに投出されている白樺^{ろくさい}の鹿^{ろくさい}砦^{さかい}。砲車の轆^{ながえ}根こそぎの叢^{くさむら}の大塊。煉瓦塀^{さかだ}の逆立ち。軍馬の屍体。そんな地獄じみた障害物が、鼠に噛じられたような棘^{とげ}々しい下弦の月の光りと、照明弾と、砲火の閃光のために赤から青へ、青から紫へ、紫から黄色へ、やがて純白へと、寒い、冷めたい氷点下二十度前後の五色の反射を急速度に繰返しなが^{マイル}ら半哩ばかり続きに続いた。

私と連れ立った候補生は、途中で苦痛のために二度ばかり失神して、あまり頑強でない私の身体^{からだ}をグラグラと引摺り倒しかけたが、私が与えた薄^{メントール}荷^{ブランデー}火酒でヤツト氣力を回

復して、喘ぎ喘ぎよろめき出した。お互いにワルデルゼイ大佐の命令の意味がわからないまま、月の出ている方向へ、息も絶え絶えの二人三脚を続けた。

しかし二人とも大佐には追附き得なかった。大佐は途中で二度ばかり私を振返つて、

「ソンナ奴は放つとき給え。早く来給え」

と噛んで吐き出すような冷めたい語気で云つたが、私の頑固な態度を見て諦めたのであろう。そのままグングンと私たちから遠ざかつて行つた。そうした理屈のわからない残忍極まる大佐の態度を見ると、私はイヨイヨ確りしつかりと候補生を抱え上げてやった。

候補生はホントウに目が見えないらしかった。その眼の前の零下二十度近い空気を凝視している二重瞼ふたえまぶたと、青い、澄んだ瞳には何等の表情も動かなかった。ただその細長い、細い、女のような眉毛だけが、苦痛のためであらう。絶えずビクビク……ビクビク……と顫動せんどうしているだけであつた。

私は遙かの地平線に散り乱れる海光色の光弾と、中空に迂り登っている石灰色の月の光りに、交る交る照らされて行く候補生の拉甸型うてんの上品な横顔を見上げて行く中に又も胸が一パイになつて来た。こんなに美しい、無邪気な顔をした青年が、氣絶する程に痛い足を十基米キロメートルも引摺り引摺り、又もあの鉄と火の八ツ裂地獄やざきの中へ追返されるのかと思うと、自

分自身が截り苛責なまれるような思いを肋骨の空隙に感じた。

候補生も何か感じているらしく、その大きく見開いた無感覚な両眼から、涙をパラパラリと落しているのが、月の光りを透かして見えた。

私は外套のポケットから使い残りの脱脂綿を掴み出してその涙を拭いてやった。……すぐに凍傷になる虞があるから……すると候補生は、わななく指で私の右手を探って、その脱脂綿を奪い取ると、なおも新しく溢れ出して来る涙を自分で拭い拭い立停まった。ガクガクと戦く左足の苦痛をジイツと唇に噛みしめ噛みしめ、だんだんと遠ざかって行くワルデルゼイ軍医大佐の佩剣の音に耳を傾けているようであつたが、やがて極めて小さい、虫のような声で私に問うた。

「軍医大佐殿とはモウ余程離れておりますか」

「……ソウ……百米突ばかり離れております。何か用事ですか」

候補生は答えないまま空虚な瞳を星空へ向けた。血の気の無い白い唇をポカンと開け、暫く何か考えているらしかったが、やがて上衣の内ポケットから小さな封筒大の油紙包を取り出して、手探りで私の手に渡して、シツカリと握らせた。

しかし私は受取らなかつた。彼の手と油紙包みを一所に握りながら問うた。

「これを……私に呉れるのですか」

「……イイエ……」

と青年は頭を強く振った。なおも湧出す新しい涙を、汚れた脱脂綿で押えた。

「お願いするのです。この包を私の故郷の妻に渡して下さい」

「^{あなた}貴方の……奥さんに……」

「……ハイ。妻の^{ところ}所書も、貴方の旅費も、この中に入っております」

「中味の品物は何ですか」

「僕たちの財産を入れた金庫の鍵です」

「……金庫の鍵……」

「そうです。その仔細^{わけ}をお話しますから……ドウゾ……ドウゾ……聞いて下さい」

と云う中^{うち}に青年は、両手を脱脂綿ごと顔に押し当てて、乞食のように連続的にペコペコ

……ペコペコと頭を下げた。私はすこし持て余し気味になって来た。

「とにかく……話して御覧なさい」

「……あ……有難う御座います……」

「サアサア……泣かないで……」

「すみません。済みません。こんなんです」

「……ハハア……」

「……僕の先祖はザクセン王国の旧家です。僕の家にはザクセン王以上の富を今でも保有しております。父は僕と同姓同名でミュンヘン大学の教授をつとめておりました。僕はその一人息子でポール・ハインリッヒという者です。今の母親は継母で、父の後妻なんです。僕と十歳ぐらいしか年齢としが違います。その父が昨年の夏、突然に卒中で亡くなりましてからは、継母は家付きの弁護士をミュンヘンの自宅に出入りさせておりますが、この弁護士がドウモ面白くない奴らしいのです。いいですか……」

「成る程。よくわかります」

「僕が継母に説伏とぎふせられて三度の御飯よりも好きな音楽をやめて、軍隊に入る約束をさせられたのもドウヤラその弁護士の策謀さしがねらしいのです。つまりその弁護士は僕と、僕の新婚の妻との間に子供が出来ない中うちに、継母ははと共謀して、財産の横領を企てているのじゃないかと疑い得る理由があるのです。その弁護士は非常に交際の広い、一種の世間師という評判です。極ごくく極く打算的な僕の継母ははもこの弁護士にばかりは惜し気もなくお金を吸い取られているという評判ですからね。僕をヴェルダンの要塞戦に配属させたのも、その弁護

士の秘密運動が効を奏した結果じゃないかと疑われる位なんです」

私は太い、長い、ふるえたタメ息を腹の底から吐き出した。最初は不承不承に聞いていたつもりであつたが、いつの間にか一も二もなく候補生に同情させられていた。

「成る程……現在の独逸には在りそうな話ですね。悪謀わるだくみに邪魔になる人間は、戦場に送るのが一番ですからね」

「……でしょう……ですから僕は、僕の財産の一切を妻のイッポリタに譲るという遺言書と一緒に、色々な証書や、家に伝わった宝石や何かの全部を詰め込んだ金庫の鍵を、戦線に持つて来てしまつたんです。ちょうど妻が伊太利イタリーの両親の処へ歸っている留守中に、僕の出征命令が突然に來たのですからね。いつもだと僕の妻が喜ぶ事を絶対に好まなかつた継母ははが、不思議なほど熱心に妻にすすめて故郷へ歸らせて、非常な上機嫌で駅まで送つたりました態度がドウモ可怪おかしいと思つていたところだつたのです」

「成る程。よくわかります」

「それだけじゃないのです。私の出征した後で歸つて來た妻は、私の母親と弁護士に勧められて、他家よそへ縁附くように持ちかけられているし、妻の両親も、それに賛成している……という手紙が妻から來たのです」

「それあ怪しからんですね」

「……怪しからんです……しかし妻は、僕から離別した意味の手紙を受取らない限り、一歩もこの家を出て行かないと頑張っているようですが……私たちは固く固く信じ合っているものですからね……」

候補生は一秒の時間も惜しいくらい迅速に、要領よく事情を説明した。恐らく彼が鉄と、火と、毒瓦斯ガスの中で一心を凝こらして考え抜いて来た説明の順序を、今一度、ここで繰返したものだった。そのせいも、こうした甘ったるいお惚のろけが、氷のように切迫した人生の一断面を作つて、私の全神経に迫つて来たのであった。

「どうぞどうぞ後生ですから、この鍵を極秘密の裡うちに妻に手渡しして下さい。僕の妻からハインリツヒ伯爵家の主婦の地位と、巨額の財産を奪い取るべく暗躍している者が随分多いのですから……」

私は思わず襟えりを正した。それは立佇たちどまつている中にヒシヒシと沁み迫まつて来る寒気のせいではなかった。

見も知らぬ人間にこうした重大な物品を委託するポーエル・ハインリツヒ候補生の如何にもお坊ちゃんらしい純な、無鉄砲さに呆れ返りながらも、無言のままシツカリと油紙包

みを受取った。

「……ありがとうございます。ドウゾドウゾお願いします……僕は……この悩みのために二度、戦線から脱走しかけました。そうして二度とも戦線に引戻されましたが、その三度目の逃亡の時に……今朝けさです……ヴェルダンのX型堡ほうい壘前の第一線の後方二十米メートル突の処の、夜明け前の暗黒くらやみの中で、この腓こむちを上官から撃たれたのです……この包を妻に渡さない間は、僕は安心して死ねなかったのです」

「……………」

「……しかし……しかし貴方あなたはこの上もなく御親切な……神様のようなお方です。僕の言葉は無条件で真実と信じて下さる御方であるという事が、僕にチャントわかっています。……どうぞどうぞお願いします。クラデル先生。どうぞ僕を安心して、喜んで祖国のために死なして下さい。眼は見えませぬが敵の方向は音でもわかります。一発でもいいから本気で射撃して下さい。独逸軍人ドイツの本分を尽して死なして下さい」

そう云う中うちにポーエル候補生は手探りで探り寄って来て、私の両肩にシツカリと両手をかけた。私の軍帽の底ひさしを見下して、マジマジと探るように凝視していたが、イクラ凝視しても、何度眼をパチパチさしても私の顔を見る事が出来ないのが自烈度じれつたいらしかった。

「……見えませぬ。……見えませぬ。神様のような貴方のお顔が見えませぬ……ああ……残念です……」

私は思わず赤面させられた。私は自分の顔の怪奇さを知っている。それはアンマリ立派な神様ではない……コンナ顔は見られない方がいい……と思った。

「ナアニ、今に見えるようになりますよ。失望なさらないように……」

候補生は真黒く凍った両手で、私の鬚だらけの両頬をソツと抱え上げた。両眼をシツカリと閉じて頭低れた。その瞼から滴り落ちる新しい涙の一粒一粒が、光弾の銀色の光りを宿して、黒い土に消え込んだ。少年は神様に祈るような口調で云った。

「僕はモウジキ死にます。遅かれ早かれヴェルダンの土になります。……その前にタツタ一眼先生のお顔を見て死にとう御座います。先生のお顔を記憶して地獄へ墜ちて行きとう御座います。ほかに御礼のし方がありませんから……モウ……太陽……月も……星も……妻の顔も見ないでいいです。そんなものは印象し過ぎる程、印象しておりますから。タツタ一眼……御親切な先生のお顔を……ああ……残念です……」

私はモウすこしで混乱するところであつた。

死のマグネシウム光が照し出す荒涼たる黒土原……殺人器械の交響樂が刻み出す氷光

の静寂の中に、あらゆる希望を奪い尽くされた少年が、タツタ一つ恩人の顔だけを見て死にたいと憧憬^{あくが}れ願っている……その超自然的な感情が裏書きする戦争の暴風の破壊が……秒速数百米^{メートル}突の鉄と火の颶風^{ぐふう}、旋風、^{ひょうふう}風、^{たいふう}颶風……その覺え切った靈魂のドン底に纔^{わず}かに生き残っている人間らしい感情までも、脅やかし、吹き飛ばし、掠奪しようとする。その怖ろしい戦争の無限の破壊力の中から、何でも構わない、美しい、楽しい、靈的なものの一片でも掴み止めようとしている少年の憐れな努力……溺れかけている魂が、海底へ持つて行こうとしている小さな花束……それがまあ「醜い私の顔」である事にやつと気が付いた私はモウ、ドウしていいのか、わからなくなってしまった。

しかし地平線の向うでダンダンと発狂に近付いて来るヴェルダン要塞の震動に、凝然と耳を傾けていた候補生は、間もなく頭を強く左右に振った。ヨロヨロと私から退き離れた。「ああ。何もならぬ事を申しました。さあ参りましょう。軍医大佐殿が待っておられますから……疑われると不可^{いけ}ませんから……」

私はここでシツカリと候補生を抱き締めて、何とか慰めてやりたかった。昂奮の余りの超自然的な感情とはいえ、この零下何度の殺氣に鎖^{とじ}された時間と空間の中で、コンナに美しい、純な少年から、これ程までに信頼され、感謝された崇高な一瞬間を、私の生涯の

中でも唯一、最高の思い出として、モットモット深く、強く印象したかった。^{うち}

しかし候補生は何かしら気が急^せくらしく、早くも私の肩から離れて、よろばいよろばい歩き出していた。しかも驚くべき事には、その少年の一步一步には今までと見違える程の底強い力が籠^こっていた。それは私の気のせいばかりではなかった。真実に心の底からスツカリ安心して、勇気づけられている歩きぶりであった。少年らしい凜^{りり}々しい決心が全身に輝き溢^{あふ}れていて、その頬にも、肩にも苦痛の痕跡さえ残っていないかった。その見えない二つの瞳には、戦場に向って行く男の兇^こ特有の勇しい希望さえ燃え輝いていた。

私は神様に命ぜられたような崇高な感じに打たれつつ蹠^{そうろう}跟として一候補生に追いついた。無言で肩を貸してやって、又も近付いて来る砲弾の穴を迂廻させてやった。

三

やがて二基米^{キロメートル}も来たと思う頃、半月の真下に見えていた村落の廃墟らしい処に辿り付いた。

その僅かに二三尺から、四五尺の高さに残っているコンクリートや煉瓦塀の断続の間に

白と、黒と、灰色の斑紋まだらになった袋の山みたような物が、射的場の堤防ぐらいの高さに盛り上っていた。私はそれを工兵隊が残して行った大行李の荷物か、それとも糧秣の山積かと思っていたが、だんだん接近するに連れて、その方向から強烈な、たまらない石油臭が流れて来たので、怪訝おかしいと思つて、なおも接近しながらよくよく見ると、その袋の山みたようなものは皆、手足の生えた人間の死骸であつた。白い斑まだらと見えたのは顔や、手足や、服の破れ目から露出した死人の皮膚で、それが何千あるか、何万あるか判然わからない。私たちが今まで居た白樺の林から運び出されたものも在つたろうし、途中で死亡して直接にここに投棄なげすてられたものも在つたろう。石油の臭気は、そんな死体の山を一挙に焼き尽すつもりでブツかけて在つたものと考えられる。

青褪あおざめた月の光りと、屍体の山と、たまらない石油の異臭……屍臭……。

もうスツカリ麻痺していた私の神経は、そんな物凄い光景を見ても、何とも感じなかったようであつた。候補生を肩にかけたままグングンとその死骸の山の間に進み入った。ガチャリガチャリと鳴る軍医大佐の佩劍はいけんの音をアテにして……。

そこは戦前まで村の中央に在つた学校の運動場らしかった。周囲に折れたり引裂かれたりしたポプラやユーカリの幹が白々と並んでいるのを見てもわかる。その並木の一本一本

を中心にして三方に、四五米^{メートル}高さの^{ほうるい}堡壘のように死骸が積重ねて在って、西の方の地平線、ヴェルダンに向った方向だけがU字型に展開されているのであった。

その広場の中央に近く、やはり数十の負傷兵が、縦横十文字に投出されたように寝転がっていたが、しかしこの負傷兵たちが、何のために白樺の林から隔離されて、コンナ陰惨な死骸の堡壘の中間に収容されているのか私はサッパリ見当が付かなかった。しかもこの連中は比較的軽傷の者が多いらしく、村の入口らしい、石橋の処で待っていた大佐と、私たちと一緒に中へ進み入ると、寝たまま半身を起して敬礼する者が居た。それは特別に軍医の注意を惹いて、早く治療を受けたいといったような、負傷兵特有の痛々しい策略でもないらしい敬礼ぶりであった。

しかしワルデルゼイ軍医大佐は、そつちをジロリと見たきり、敬礼を返さなかった。直ぐに私の方を振り返って、

「その小僧をそこへ突放し給え」

と云ったがその鬚だらけの顔付の恐しかったこと……月光を背にして立っていたせいでもあったろう。地獄から出張して来た青鬼か何ぞのように物凄く見えた。

私が候補生を地面にソツと寝かしてやると、軍医大佐は苦々しい顔をしたまま私を身近く招き寄せた。携帯電燈をカチリと照して、そこいらに寝散らばっている負傷兵の傷口を、私と一緒に一々点検しながら、無学な負傷兵にはわからない露西亞語と、羅典語と、術語をゴツチャにした独逸語で質問しはじめた。

「この傷はドウ思うね……クラデル君……」

「……ハ……右手掌、貫通銃創であります」

「普通の貫通銃創と違ったところはないかね」

「銃創の周囲に火傷があります」

「……という……どういう事になるかね」

私はヤット軍医大佐の質問の意味がわかった。

しかし私は返事が出来なかった。……自分の銃で、自分の掌を射撃したもの……と返事するのは余りに残酷なような気がしたので……。

大佐は鬚の間から白い歯を露わしてニヤリと笑った。直ぐに次の負傷兵に取りかかった。
「そんならこの下士官の傷はドウ思うね」

「……ハ……やはり上膊部の貫通銃創であります。火傷は見当らないようですが……」

「それでも何か違うところはないかね」

「……弾丸の入口と出口との比較が、ほかの負傷兵のと違います。仏軍の弾丸ではないよ
うで……近距離から発射された銃弾の貫通創と思います」

「……ウム……ナカナカ君はよく見える。そこでつまりドウいう事になるかね」
私は又も返事に困った。前の時と同じ理由で……。

「この脚部の創きずはドウ思うね。君が今連れて来た候補生だが……」

「弾丸の入口が後方に在ります」

「……というとドンナ意味になるかね」

「……………」

「それじゃ君……コツチに來たまえ。この腕の傷がわかるかね」

「わかります。弾丸の口径が違います。私は剔てきしゅつ出してやったのです」

「何の弾丸だったね。それは……」

「……………」

「味方の将校のピストルの弾丸たまじゃなかったかね」

「……………」

「……ハハハ……もう大抵わかったね。ここに集めて在る負傷兵の種類が……」

「……ハイ……ワ……わかりました」

私は何故となくガタガタ震え出した。

しかしワルデルゼイ軍医大佐は、依然として「研究」を中止しなかった。なおも次から次へと私を引っぱりまわして、殆んど百名に近いかと思われる負傷者の患部を診察しては質問し、質問しては次に移って行つたが、いずれもその最後は、私が答える事の出来ない質問に帰着する種類の負傷ばかりであつた。

悽愴極まる屍体の山と石油臭の中に隔離されている約一小隊の生霊に、モウ間もなく与えられるであろう軍律の制裁……或る不可知の運命を考えさせられながら、その不名誉この上もない……寧ろ悲惨事以上の悲惨事とも見るべき超常識的な負傷の傷口を一々、念入りに診察して行く中に、私の背筋の全面が、気温を超越した冷汗にジツトリと蔽われた。烈しい恐怖の予想から来る荒い呼吸のために、私の鬚の一本一本が真白い霜に蔽われた。膝頭と齒の根が同時にガタガタと音を立てそうになって来た。そうして百に近い負傷兵の何となく覺えた、怨めしそうな、力ない視線に私の全神経が射竦められて、次第次第に気が遠くなりかけて来た時にヤット全部の診察、研究が終ると、大佐は私を些し離れた小高

い土盛の上に連れて行つて、軍刀をグット背後に廻した。両耳の蔽いを取つて自分の顔を、手袋をはめた両手で強く摩擦し初めた。

「……そこでクラデル君。これらの全部の負傷兵の種類を通じての特徴として、君は何を感じますかね」

「……ハツ……。皆、味方の銃弾か、銃剣によつて傷きずつてゐる事であります。砲弾、毒瓦ガス、鉛筆（仏軍飛行機が高空から撒布して行く短かい金属性の投矢の一種）等の負傷は一つも無い事です」

「……よろしい……」

吾が意を得たりという風に云い放つた軍医大佐はビタリ顔面の摩擦を中止した。満足うなずげに首肯き首肯き小高い土盛りの中央に月の光を背にして立つた。今一度、勢よく軍刀の背後に押しやつて咳がい一咳いちがいした。振返つてみるとヴェルダンの光焰が、グングンと大空に這い昇つて、星の光りを奪いつつ湧き閃めいている。

その時に姿勢を正したワルデルゼイ軍医大佐は、三方の屍体の山を見まわしながら真白い息を吐いて長吼ちやうくした。

「……皆ア……立て——エツ……」

アツチ、コツチに寝転がっていた負傷兵が皆、弾かれたようにヒヨコリヒヨコリと立上った。中には二三人、地面に凍り付いたように長くなっている者も在ったが、それは早くも軍医大佐の命令の意味を覚つて、失神した連中であつたらしい。

何の反響も与えない三方の屍体の山が、云い知れぬモノスゴイ気分を場内一面に横溢させている。

「皆、俺の前に一列に並べ。早く並べ……何をしとるか。倒れとる奴は引摺り起せ」

声に応じて二三人の負傷兵が寄り集まつて、長くなっている仲間を抱き上げようとしたが結局、無駄であつた。正体のなくなっている酔漢と同様にグタグタとなつて何度も何度も戦友の腕から沁り落ちるのであつた。真実に氣絶しているらしいので、凍死しては不可いけないと思つて、私が近附いて行こうとするのを大佐が押止めた。

「……放つとき給え……ほつときたまえ……凍死する奴は勝手に凍死させておけ。そんな者はいいいから早く並べ。……ヨオシ……皆、氣を付け……整頓……番号……」

「二、三、四……八十……八十一ツ……」

「八十一か……」

「ハイ。八十一名であります」

最後尾に居るポーエル候補生が真正面を向いたまま答えた。

「よろしい。寝ている奴が三人と……合計八十四名だな」

「そうであります」

今度は候補生の一つ前に居る中年の軍曹が答えた。ピストルで腕を撃たれている男だ。肩から白い繃帯と副木で綿に包まれた腕を釣っているのがこの場合、恐ろしく贅沢なものに見える。

「……よろしい……」

軍医大佐が又も咳一咳した。

「……馬鹿……誰が休めと云うたか……銃殺するぞ。馬鹿者奴がッ。……気を付け……」

死骸の山を背景にして、蒼白な月光に正面した負傷兵の一行の顔はドレもコレも生きた色を失っていた。死人よりも力ない……幽霊よりもタヨリない表情であつた。その生きた死相の行列は、一生涯、私の網膜にコビリ付いて離れないであろう。

「……汝等は……何故に普通の負傷兵から区別されて、ここに整列させられているか、自分で知っているか」

軍医大佐の言葉が終らぬ中^{うち}に又も二三人、気が遠くなつたらしい。ドタリドタリと棒倒

しに引っくり返った。ヤツト自分達の立場が彼等にわかつたらしい。

ツルツルと一筋、つめたい汗の玉が背筋を走ったと思うと、私も眼の前の光景が、二三
 十基^{キロ}も遠方の出来事のように思えて来た。

倒れた仲間を振返つて見る者は愚か、身動きする者すらいなかった。皆、蒼白い月の光
 の中に氷結したようにシインと並んで立っていた。……その時の彼等がドンナ気持で立っ
 ていたか、私には想像出来なかった。ただボンヤリと飾^{かざり}氷^{ごおり}の中の花束の行列を聯想さ
 せられていただけであつた。死んだまま立っている人間の行列……死刑を宣告されかけて
 いる自傷兵の一小隊……。

「わからなければモウ一つ質問する」

軍医大佐は一步前進して自分の背後を指した。

「眼を開いて汝等の正面を見よ。あの物凄い銃砲の音と、火薬の渦巻を見よ。あれが見え
 るか。あれは一体、何事であるか……わかるか……」

「……………」

誰も返事をしなかった。返事の代りに又も二三人バタリバタリと引っくり返っただけで
 あつた。

「……よろしい……それから……廻れエ、右ツ……」

皆、器械のように決然と廻転した。序に^{ついで}ブツ倒れた者もいたくらい元気よく……。

「よしッ。汝等の背後に山積して在る汝等の同胞の死骸を見よ……これはイッタイ何事であるか汝等の同胞は何のためにコンナ悲壮な運命を甘受しているのか……わかるか……」

思い出したように頸^{うなだ}低れた者が四五人。軍服の袖を顔に当ててススリ泣^{なき}を初めた者が二

三人……。

光弾が……仏軍のマグネシウム光がタラタラと白い首筋の一行を照して直ぐに消えた。

「……よろしい。廻れエ、右ツ……整頓……。わからなければ今一つ尋ねる。ええか。…

…イッタイ吾々軍医なるものは何のために戦場に来ているのか汝等は知っているか」

「……………」

「……ただ自分達の負傷の手当のためにばかり来ていると思ったら大間違いだぞ。汝等のような売国奴同然の非国民を発見して処分するのが俺達、軍医の第一、第二、第三の責務である。負傷の手当てなどいうものは第四、第五の仕事という事を知らないのか！ エエ

ッ！」

そういう中^{うち}にもバタバタと四五人卒倒した。齒の抜けたようになった一行横隊がまたも、

アリアリと光弾に照し出された。

ワルデルゼイ軍医大佐は更に強く咳一咳した。声がすこし噎しやがれたせいか、口調が一層、

深刻に冴え返つて来た。傍に立っている私までも、氣絶することを忘れて傾聴させられた。

「……ええか……よく聞け……軍医の学問の第一として教えられることは自傷ゼルウーの鑑別方みわけ法かたである。戦場から退却しりぞきたさに、自分自身で作る卑怯な傷の診察し方である。吾儕われわれ軍

医はこれゼルプスト・ウンデーを自傷……略してS・Wと名付けている。すなわちS・Wの特徴は生命に別条の

ない手や足に多い事である。そんな処を戦友に射撃してもらったり、自分で射撃したりして

作つた傷は、距離が近いために貫通創の附近に火傷が出来る。火薬の燃え粕かすが黒いポツ

ポツとなつて沁み込んでいる事もある。……さもなくとも仏軍の弾丸と吾軍の弾丸は先頭

の形が違ふために傷口の状況が、一目でわかるほど違っている。口径の違うピストルの傷

は尚更なおさら、明瞭である。塹壕の外に故意わざと足を投出したり、手を突出したりして受けた負

傷と、銃身を構えて前進しながら受けた傷とは三歳児みつごでも区別出来ることを汝等は知らん

のか。それ位の自傷がわからなくて軍医がつとまると思うのか。そんな卑怯な、横着な傷

に吾儕われわれ、軍医が欺むかれて、一々鉄十字勲章と、年金を支給されるように吾々が取計ら

って行つたならば、国家の前途は果してドウなると思つていいのか。常識で考えてもわか

る事だ……仮病、詐病、佯^{にせきちがい}狂、そのほか何でも兵隊が自分自身で作^{つく}り出した肉体の故障ならば、一目でわかるように看護卒の端々までも仕込まれているのだぞ……俺達は……」

「……………」

「……現在……汝等の父母の国は、汝等の父母が描きあらわした偉大な民族性の発展を恐れ憎んでいる全世界の各国から撃滅されむとしつつ在る。學術に、技芸に、經濟政策に、模範的の進取精神を輝かして、世界を掠奪せむとしている吾々独逸民族に対して、卑怯、野蛮な全世界の未開民族どもが、あつた限りの非人道的な暴力を加えつつ在る。英、仏、伊、露、米、等々々は皆、吾々の文化を恐れ、吾々の正義を滅ぼそうとしている旧式野蛮国である……わかつたか……」

「……………」

「これを憤つたカイゼルは現在、吾々を率いて全世界を相手に戦っている。汝等の父母、同胞、独逸民族の興亡を賭^として戦っている。人類文化の開拓のために……よろしいか……」

「……………」

「その戦いの勝敗の分岐点……全、独逸民の生死のわかれ目の運命は、今、汝等の真正面に吠え、唸り、燃え、渦巻いているヴェルダンの要塞戦にかかっているのだ。その危機一

髪の戦いに肉弾となつて碎けた勇敢なる死骸は……見ろ……汝等の背後にあの通り山積しているのだ。……その死骸を見て汝等は恥しいとは思わないのか」

「……………」

「汝等はそれでも人間か。光栄ある独逸民族か。世界を敵として正義のために戦うべく、父母兄弟に送られて来た勇士と思つていいのか」

「……………」

「……下等動物の蟻や蜂を見よ。あんな下等な生物でも汝等のような卑怯な本能は持つていないぞ。汝等は実に虫ケラ以下の存在だ。神……人……共に憎む破廉恥漢とは汝等の事だ。……汝等は売国奴だ。非国民だ。生かしておけば独逸軍の士氣に関する害虫だ。ボルセビイキ以上の裏切者だ……」

「……………」

「汝等は戦死者の列に入る事は出来ない。無論……故郷の両親や妻子にも扶助料は渡らない覚悟をしろ。ただ汝等の卑怯な行為が、汝等の父母、兄弟、朋友たちに絶対に洩らされない……軍法会議にも渡されない……今日只今限りの秘密の中に葬むられる事を、無上の名誉とし、光栄として余の処分を受けよ」

私はモウ立っている事が出来ない位ふるえ出していた。眼の前の負傷兵の一行が、どうして身動き一つせずにチャント立っているのだろうと不思議に思った位であった。

ワルデルゼイ軍医大佐は、演説を終ると同時に右手を唇に当てて、呼子の笛を高らかに吹き鳴らした。その寒い、鋭い音響が私の骨の髄まで沁み徹とおつて、又も気が遠くなりかけたところへ、私の背後の月の下からオドロオドロしい靴の音が湧起つて来たので、私は又ハツと気を取直した。ポケットに忍ばせていたメントール酒の残りをグツと一息に飲のみ干して、背筋を匍はい上る胸震いと共にホーツと熱い呼吸を吹いた。わななく膝を踏み締めて、軍医大佐と共に横の方へ退いた。

それは輜重隊の太行李に配属されている工兵隊の一部が、程近い処に伏せて在ったのであろうと思われる。かねてから打合わせて在ったと見えて一小隊、約百名ばかりの腮あごひも紐をかけた兵卒が負傷兵に正面して一列に並んだ。並ぶと同時に銃を構えてガチャガチャと装填しはじめた。

その列の後方から小隊長と見える一人の青年士官が、長靴と、長剣の鎖を得意気に鳴らして走り出て来た。軍医大佐の前に来て停止すると同時に物々しく反そり返って、軍刀をギリと引抜いて敬礼した。

折からヴェルダンの中空に迂り昇った強力な照明弾が、向い合った味方同志の兵士の行列を、あく迄も青々と、透きとおる程凄惨に照し出した。
その背後の死骸の山と一緒に……。

四

若い小隊長は白刃を捧げたまま切口上を並べた。

「フランケン・スタイン工兵聯隊、第十一中隊、第二小隊カアル・ケンメリヒ中尉……」

「イヤ。御苦労です」

軍医大佐は巨大な毛皮の手袋を穿^はめた右手を挙げて礼を返した。その右手で、左から右へ水平に、残忍な……極度に冷静な一直線を指し描いた。

「この犬奴^めらを片付けて下さい」

「……ハツ……ケンメリヒ中尉は、この非国民の負傷兵等をカイゼルの聖名^{みな}によって、今、直ぐに銃殺させます」

後方勤務でウズウズしていた若い、忠誠なケンメリヒ中尉は、この使命を勇躍して待つ

ていたらしい。今一度、私等二人に剣を捧げると靴音高らかに、活潑に廻れ右をした。

トタンに照明弾が消えて四周が急に青暗くなってしまった。網膜が作る最深度の灰色の暗黒の中に、何もかもグリーンと消え込んで行ってしまった。

「……軍医殿……ワルデルゼイ大佐殿……」

という悲痛な叫び声が、照明弾の消滅と同時に負傷兵の一系列の中から聞えた。それは腸はらわたのドン底から絞り出る戦慄を含んだカスレ声であった。

……と思ううちに忘れもしない一番右翼に居た肩を負傷した下士官が、青暗い視界の中によろめき出て来て、私たちの足下にグタグタとよろめき倒おれた。起上ろうとして悶えながら、苦痛に歪んだ半面を斜めに、月の光りの下に持上げた。そのまま極めて早口に……殆んど死物狂いの意力をあらわしつつハッキリと云った。

「……ミ……皆を代表して申しますッ。コ……ここで銃殺されるよりも……イ……今一度、戦線へ返して下さいッ。イ……一発でも敵に向って発射さして、死なして下さいッ。戦死者の列に入れて下さいッ……アッ……」

いつの間にか駈け寄って来たケンメリヒ中尉が、恐ろしく憤激したらしく、半身を支え起している軍曹の軍服の背中を、革鞭むちのようにしなやかな拔身の平ひらで力一パイ……ビシン

……ビシン……と叩きのめした。

「エエツ。卑怯者ツ。今更となつて……恥を晒さらすかツ……コン畜生コン畜生コン畜生ツ……」

「アイタツ……アタツ……アタアタツ……サ……晒します晒しますツ。ワ……私は……故郷に居る、年老としおいた母親が可哀相なばかりに……もう死ぬるかも知れないお母さんが……タツタ一眼会いたがつている老母が居おる……居りますばっかりに……自……自傷しました……」

「ええツ。未練者……何を云うかツ……」

「アタツ。アタツ。わかりました。……もうわかりましたツ。何もかも諦あきらめました。ヴェルダンの火の中へ行きます……喜んで……アイタツ……アタアタアタアタツ」

月光に濡れた工兵中尉の剣光がビヨンビヨンと空間に撓しなった。

「……ナ……何を吐ぬかす。卑怯者……売国奴……」

「アツツツツ。アタツ。アタツ、待つて……待つて下さい。皆も……皆も私と同じ気持です。同じ気持です。どうぞ……どうぞこの場はお許し……お許しを……アタツ……アタツ……アタアタアタツ……ヒイ——ツ……」

可哀そうに軍曹は熱狂したケンメリヒ中尉の軍刀の鞭の下に氣絶してしまった。私は衝動的に走り寄つて、メントール酒の瓶を軍曹の唇に近附けたが、瓶は空つぽになつてゐる事に氣附いたので慚然として立上つた。

その時にワルデルゼイ軍医大佐は、なおも懸命に軍刀を揮ひかけてゐるケンメリヒ中尉を遮り止めた。

「……待ち給え。待ち給え。ケンメリヒ君……皆がこの軍曹の云う通りの氣持なら、ここで犬死にさせるのも考え物ですから……」

そう云つた軍医大佐の片頬には、何かしら……冷笑らしいものが浮かんでゐるよう思つたが……しかしそれは極度に神経を緊張させていた私の錯覚か、又は灰青い光線の工合であつたかも知れない。そのままガチャリガチャリと洋刀を鳴らしながら軍医大佐は、向い合つてゐる二列の中間に出て行つた。

不平そうに頬を膨らしてゐるケンメリヒ中尉と、ホツとした私とが、その背後から跟つて行つた。

十米突ばかりを隔てて向い合つた二列の中央に來ると軍医大佐は、又も二つ三つ揚がつた光弾の光りを背に受けながら、毅然として一同を見まわした。

同じように不動の姿勢を執っている負傷兵たちの頬には皆、涙が流れていた。その涙が光弾のゆらめきを蒼白くテラテラと反射していた。

しかしその中にタツタ一人、列の最後尾に立っている候補生の美しい横顔だけは濡れていなかった。……のみならず何かしらニコニコと不思議な微笑を浮かめて真正面を凝視しているのが、さながらに天国の栄光を仰いでいる使徒のように神々しく見えた。

けれども大佐は候補生の微笑に気付かなかったらしい。今度はハッキリした軽い冷笑を片頬に浮かめながら今一度、一同を見廻わした。

「何だ。皆泣いているのか。馬鹿共が……何故早く拭わぬか。凍傷になるではないか……休めい……」

負傷兵たちが一斉に頭を下げてススリ泣きを初めた。各自に帽子や服の袖で、頬を拭いまわし初めると、今まで緊張し切っていた場面の空気が急に和なやかになって来た。

ケンメリヒ中尉が背後の工兵隊を顧かえりみて号令を下した。まだイクラか不満な声で……。

「立てえ銃……休めえ」

「気を付け……」

と大佐が負傷兵たちに号令した。右翼の兵卒が二名出て来て、気絶している軍曹を抱え

起して行つた。

「皆わかつたか」

「……わかりました……」

と全員が揃つて答えた。生き返つたような昂奮した声であつた。

大佐も幾分調子に乗つたらしい。釣込まれるように両肱を張り、両脚を踏み拡げて、演説の身構えになつた。

「……よろしい……大いによろしい……現在の独逸は、数百カラットの宝石よりも、汝等に与える一発の弾丸の方が、はるかに勿体ない位、大切な場合である。同様に汝等の生命が半分でも、四分の一残つていても構わない、ヴェルダンの要塞にブツ付けなければならぬのが我儕、軍医の職務である……わかつたか……」

「わかりました」

大佐の演説の身振りがだんだん大袈裟おおげさになつて来た。

「……よろしい……もうすこし云つて聞かせる……近い中に独逸の艦隊が、英仏の聯合艦隊をドーバーから一掃してティムス河口に殺到する。そうしたら倫敦ロンドンは二十四時間の中うちに無人の廢墟となるであらう。一方にヴェルダンが陥落してカイゼルの宮廷列車が巴里パリに

到着する。逃場を失った聯合軍はピレネ山脈とアルプス山脈の内側で、悉く殲滅ことごとせんめつされるであろう。独逸の三色旗が世界の文化を支配する暁が来るであろう。その時に汝等是一人残らず戦死しておれよ。それを好まない者はたつた今銃殺してやる。……味方の弾丸を減らして死ぬるも、敵の弾丸を減らして死ぬるも死は一つだ。しかし光榮は天地の違いだぞ……わかったか……」

「わかりました」

大佐は演説の身ぶりをピタリ止めて、厳正な直立不動の姿勢に返った。右手を揚げて列の後尾を指した。

「……よし行け……その左翼の小さい軍曹……汝の負傷は一番軽い 上膊じょうはく貫通であろう。汝……引率して戦場へ帰れ。負傷が軽いので引返して来ましたと、所属部隊長に云うのだぞ……ええか……」

「……ハツ……陸軍歩兵軍曹……メツケルは負傷兵……八十……四名を引率してヴェルダンの戦線に帰ります。軽傷でありましたから帰って来ましたと各部隊長に報告させます」

「……よろしい……今夜の事は永久に黙っておいてやる……わかったか……」

「……わかりました。感謝いたします」

「……ヤツ……ケンメリヒ中尉。御苦労でした。兵を引取らして休まして下さい。御覽の通り片付きましたから……ハハハ……」

そんな風に、急に気軽く碎けて来た軍医大佐のあたたかい笑い声を聞くと同時に、私の全身がゾオツと粟立^{あわだ}つて来た。頭の毛が一時にザワザワと逆立ち^{さかだ}初めた。……今までの出来事の全体が、一種の極端な芝居ではなかったか……といったようなアラレもない感じが、頭の片隅にフツと閃めいたからであつた。

それは今の今まで、この鋼鉄製の脳髓を持った軍医大佐から、あまりにも真剣過ぎる超自然的な試練に直面させられて、ヘトヘトにまでタタキ附けられている私の脳髓が感じた一種の弱い、しかし強く鋭い一種の幻覚錯覚であつたかも知れない……。

……ワルデルゼイ軍医大佐は元来、非常な悪党なのではあるまいか。西部戦線の裡面に巨大な巣を張りまわして、こうした方法で出征兵士の生血^{いきち}を啜^{すす}っている稀代の大悪魔なのではあるまいか。大佐は出征兵士の故郷の人々から金を貰って色々な不正な事を頼まれているのではあるまいか。

……戦争がその背後に在る国民の心を如何に虚無的にし、無道德にし、且つ^か邪惡にするかという事実は、吾が独逸の国民史を繙^{ひもと}いてみても直ぐにわかる事である。しかも近

代的な唯物觀から來た虚無思想と、法律至上主義によつてゲルマン民族の伝統的な誇りとなつていた吾が独逸国内の家庭道德が、片端から破壊されつつ在る今日に於て勃発した戦争である以上、こうした崩壞の道程に在る家庭内の不倫、不道德が、独逸軍の裡面に反映しない筈はないのである。

……出征兵士の中には、あの美少年候補生が話したような家庭の事情のために、是非とも殺されなければ都合の悪い運命を背負つてゐる若い連中が何人、混交^{まじ}つてゐるかわからないであろう。その氣の毒な犠牲候補たちが、万一にも負傷して後送される事のないように……又はソナ連中が、故郷の事を氣にかける余りに、自傷手段で戦線から逃出して来るような事がないように、大佐は平生から沢山の賄賂を貰つて、シツカリと頼まれているのではあるまいか。

……だから、あんなに熱心に患者を診察して廻つたのではあるまいか。そうして、そんな連中を何でもない普通の自傷兵とゴツチャにして、あんな風に脅迫して、無理矢理に戦線へ送り返してゐるのではないか。……だから、私を利用して、その計略の裏を掻いた候補生が、あんなにニコニコと微笑してゐるのではなからうか……。

……といったような途方もない、在り得べからざる邪惡な疑いが、腸^{はらわた}の底から湧き出す

胸震いと一所に高まつて来た。そうしてソナのような馬鹿馬鹿しい、苦痛にみちみちた悪夢からヤツと醒めかけたような……ホツとしたような気持になると同時に私は又、急に胸がムカムカして嘔きそうな気持になつて来た。何とも感じなくなつていた屍臭と石油臭が、俄に新しく、強く鼻腔を刺戟し初めた……が……そのまま無理に平気を装つて、軍医大佐の背後に突立つていた。

そうした私の疑惑を打消すかのように、向い合つていた二条の一群横隊は、私たちの眼前で同時に、反対の方向を先頭にした一群縦隊に変化した。そうして一方は元気よく、勝誇つたように……一方は屠所としよの羊のように、又は死の投影のように頸低うなだれて、気絶した仲間を扶たすけ起し扶け起し、月光の真下で別れ別れになつて行つた。

その別々の方向に遠ざかつて行く兵士の行列をジイツと見送つてゐる中に、私は又も、更に新しい、根本的な疑惑の中に陥つて行つた。

……彼等は一体、何をしに行くのであろうか。

……戦争とは元来コンナものであろうか。彼等はホントウに戦争の意義を知つて戦争に行くのであろうか。彼等が戦争に行くのは国のためでも、家のためでもない。ただワルデルゼイ大佐に威嚇されて、死刑にされるのが厭いやさにヴェルダンの方向へ立去るので

はあるまいか。

私はいつの間にか国家も、父母も、家庭も持たない、ただ科学を故郷とし、書物と器械と、薬品ばかりを親兄弟として生きて来た昔の淋しい、空虚な、一人ポッチの私自身に立ち帰っていた。

……自分は伯林^{ベルリン}を出る時に、カイゼルに忠誠を誓って来るには来た。しかし、それでも本心をいうと自分は、真実のゲルマン民族ではないのだ。彼等兵士とも、眼の前に突立っているワルデルゼイ氏とも全然違った人種なのだ。自分自身でも自分が何人種に属するかわからない単なる一個の生命……天地の間に湧き出した、医術と音楽のわかる小さな一匹の蛆^{うじむし}虫に過ぎないのだ。

……その三界^{さんがい}無縁の一匹の蛆虫が、コンナにまでも戦慄し、驚愕して、云い知れぬ良心の呵責をさえ受けている原因はどこに在るのだろう。

……一体自分はここへ何しに来ているのだろう。

私はこの死骸の堡壘の中で、曾ての中学時代に陥った記憶のある、あの虚無的な、底抜けの懐疑感の中へ今一度、こうして深々と陥^はまり込んでしまったのであった。今の疲れ切った頭では到底、泳ぎ渡れそうにない、無限の、底無しの疑惑の海……。

そう思えば思うほど、そうした戦争哲学のドン底に渦巻いている無限の疑惑の中に私はグングンと吸い込まれて行つた。見渡す限りの黒土原……ヴェルダンの光焰……轟音……死骸の山……折れ砕けた校庭の樹列……そうしてあの美しい候補生……等々々も皆、そうした疑惑の投影としか思えなくなつて来た。

そう思い思い私はフト大空を仰いだ。

……あの大空に白く輝いている、割れ口のギザギザになつた下弦の月こそは、そうした戦争に対する疑惑の凝り固まつた光りではなかったか……氷点下二百七十三度の疑惑の光り……。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

初出：「改造」改造社

1936（昭和11）年5月号

入力：柴田卓治

校正：kazuishi

2004年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

戦場

夢野久作

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>